

01-040

親子の絆づくりプログラム「赤ちゃんがきた！」における参加者の満足度に影響する因子の検討

原田大輔¹、木村美貴子²、北林愛理³、中野真由⁴、倉谷千尋⁵、池内葉子⁶、阪本夏子¹、柏木博子¹、鈴木志帆⁶、今井康乃^{3,6}、中野美佳^{3,5}、中筋葉子²、大八木知史⁷、難波範行¹

¹地域医療機能推進機構（JCHO）大阪病院 小児科
²地域医療機能推進機構（JCHO）大阪病院 小児病棟
³地域医療機能推進機構（JCHO）大阪病院 小児科外来
⁴地域医療機能推進機構（JCHO）大阪病院 産科病棟
⁵地域医療機能推進機構（JCHO）大阪病院 NICU
⁶地域医療機能推進機構（JCHO）大阪病院 産婦人科外来
⁷地域医療機能推進機構（JCHO）大阪病院 産婦人科

【背景】

親子の絆づくりプログラム「赤ちゃんがきた！」(BP: Baby's Program) は、初めて0歳児を子育て中の母親を対象に作成された、本邦唯一の参加型子育て支援プログラムである。我々は2012年から8年間にわたって、主に当院で出産した母親を対象にBPを続けており、育児ストレスの解消に効果的であることを2018年度の本学会で発表した。

【目的】

BP参加者の満足度に影響する因子を同定する。

【方法】

対象は2014年11月から2018年6月までのBP参加者365組。BP参加半年後に背景、愛着、ストレス、育児知識、振り返ってみてBPの満足度、などを含む48項目の2～5選択式アンケート調査を実施した（回収率72.9%）。今回、「振り返ってみてBPの満足度」（以下、「満足度」）に影響する因子を同定するため、アンケートの回答を数値化し、重回帰分析による多変量解析を施行した。因子選択は変数増減法を採用して $p < 0.05$ を有意とした。本研究はJCHO大阪病院医学倫理委員会で承認を得ている（承認番号：2017-52）。

【結果】

参加者の87.5%が第一子妊娠前に何らかの形で就労していたが、乳児期後期には93.9%が「主婦」や「育児休暇中」などで未就労であった。満足度としてBP参加者の85.7%が「とても満足」と回答した。多変量解析の結果、満足度に影響する因子として、「参加者と交流がある」($p < 0.001$)、「親族以外に子育ての話ができる人がいる」($p = 0.003$)、「子育てにやりがいを感じる」($p = 0.005$)、「子どもをもって社会が広がった」($p = 0.028$)、「子育ての心配ごとがない」($p = 0.036$)、「次子がほしい」($p = 0.045$)の6項目が挙げられた。

【考察】

プログラムは満足度をもって評価される（安田節之ら 新曜社 2008）。本研究では、BP参加者どうしの交流継続が育児の心配ごとを減らし、育児のやりがいや母親の社会性獲得を促して、プログラムの満足度に寄与することが示された。またそれらは次子を持つことへの希望にもつながることが示唆された。BPには、参加者が初めて乳児を子育て中という同じ境遇にあり、子育て仲間を作りやすい要素が多く含まれる。出産前後の就労状況から、母親の生活が産後に大きく変化して社会からの途絶も予想されるが、BPを通して子育て仲間を獲得することが、この状況を打破するきっかけになることが期待される。

【結論】

BPの満足度を規定する最も重要な因子は、参加者どうしの交流に代表される子育て仲間の獲得である。

01-041

健康な乳幼児をもつ親の育児情報源に関する実態調査

木田有紀¹、佐藤光紗²、野原夢叶²、市川正人³

¹JA北海道厚生連 札幌厚生病院 看護部
²独立行政法人 地域医療推進機構 北海道病院 看護部
³北海道科学 保健医療学部 看護学科

【目的】

2017年現在、我が国における30代のモバイル端末所有率は91.3%であり、この10年でインターネットの利用状況は大きく変化した。そのため本研究は、乳幼児をもつ親の育児情報源の現状を明らかにすることを目的に実態調査を行った。

【方法】

生後3か月～就学前の乳幼児をもつ親を対象に自記式質問紙調査を実施した。調査期間は2018年9月。調査内容は、日頃活用している育児情報源（以下、育児情報源）、対象者の属性（年齢、性別）とした。収集したデータに対し単純集計及びMann-WhitneyのU検定を行った。なお、本研究は、北海道科学大学倫理委員会の承認を得て実施した(346号)。

【結果】

質問紙の配付数は103部、回収数は103部（回収率100%）、有効回答数は103部（有効回答率100%）であった。対象者の年齢は、35歳未満43名（41.7%）、35歳以上59名（57.3%）無回答1名（1.0%）であった。性別は、女性61名（59.2%）、男性42名（40.8%）であった。対象者が育児情報源の中で「大いに活用していた」ものは、「検索サイト（Yahoo!・Google等）」37名（35.9%）であり、次いで「あなたの父・母」27名（26.2%）であった。一方で、「活用していない」ものは、「新聞」38名（36.8%）、「育児関係以外の書籍」34名（33.0%）であった。育児情報源と年齢での比較では、育児関係以外の書籍 ($p = 0.025$)、新聞 ($p = 0.004$)、その他の家族 ($p = 0.036$) で有意差がみられ、いずれも35歳以上の者が活用している傾向がみられた。

育児情報源と性別での比較では、SNS ($p = 0.049$)、検索サイト ($p = 0.011$)、あなたの父・母 ($p = 0.013$)、その他の家族 ($p = 0.008$)、友人 ($p = 0.000$) で有意差がみられ、いずれも女性が活用している傾向がみられた。

【考察】

結果より、対象者が最も活用している育児情報源は「検索サイト」であった。しかし、検索サイトを通して閲覧されるWebサイトは必ずしも専門家が監修しているとは限らず、信憑性が担保されていない。また、対象者は何をキーワードにするべきかわからなければ検索することはできない。さらに、検索サイトは不確かな知識を深めるためには有効なツールであるが、一方で対象者が知らない知識を新たに入手することは困難である。そのため、インターネットを通じて対象者が情報を受動的に得ることができるようなアプリケーションの開発や活用が必要であると考えた。